

「ICT 演習」授業の見直しと実践

阿 部 一 晴

1. はじめに

社会の情報化がますます高度に進む中、情報を様々な場面で活用する能力（いわゆる情報リテラシー）は、職業や役割等に関わりなく社会人全般に求められていると言える。大学教育においても、理系・文系・学際系といった専門分野を問わず、主に新入生（1年生）対象のカリキュラムの中に、これらを養成する科目を配当しているケースが多い。本学においては、現時点のカリキュラムに、コンピュータやネットワークの基本や仕組み等を座学で学ぶ「コンピュータ基礎」「ネットワーク基礎」（全学科対象に e-learning で提供 各2単位）と、主に PC を使ったの実習を通じて、情報機器の操作、使いこなしから情報の有効な活用を学ぶ「ICT 演習Ⅰ」「ICT 演習Ⅱ」（全学科対象に演習形式で提供 各1単位）という、情報リテラシー関連の4つの科目を置いている。

特に「ICT 演習」は、必修科目ではないものの、これまでも毎年全学科の新入生ほぼ全員が受講している。また、一人一台パソコンの実機を使用している実習を中心とした科目であるため、実習室環境の制約等から一クラスの人数も増やすことができない（最大でも一クラス40数名まで）。これらの背景から、同一内容を提供する複数クラスでの開講を余儀なくされる（2013年度は10クラス開講）。時間割上同じ曜日の同じ時間に複数クラスが開講されることもあり、授業は複数の非常勤の先生方に担当いただいていた。専任教員がコーディネータとして、全体の内容、レベル、進行、成績評価等の調整をおこなっているが、それでも講師によって授業の内容、進行方法は細部まで統一することは現実には難しい。また、情報社会の進化にともない大学卒業者が修得していると考えられる「情報リテラシー」への期待も変化してきている。しかし、本学でこれまで提供していた「ICT 演習」は、基本的にこれまで長くやってきた、いわゆる Office ソフトを中心とした PC 操作教育の域を出ておらず、現在社会で求められる、より積極的な情報の利活用の領域ま

で十分踏み込めていなかったことも否めない。

こういった中、情報教育を専門とする業者から、大学におけるこの種の「情報リテラシー教育」の、ある意味パッケージ的な教育コース提供についての提案を受けた。この業者は、複数の大学で同種の教育を、全部もしくは一部業務として受託し、提供している実績を持つ。これらの大学での実際の授業内容のヒアリングや、業者から提案の特に「情報活用能力」を育成するためのカリキュラムや授業方法、授業外での支援等について検討した結果、本学においても本年度（2013年度）から、「ICT 演習Ⅰ」「ICT 演習Ⅱ」二科目の授業提供と関連する教育支援について、この業者へ委託して実施することとした。前期「ICT 演習Ⅰ」より、これまでのクラスごとの非常勤の先生方による授業担当から、授業実施のみではなく関連支援を含めて一括して委託する形態に変更した。

本稿では、2013年度より試行的におこなった「ICT 演習」授業と関連支援の教育専門業者への業務委託について、これまでの授業からの変更内容および前期終了段階での、この方法による授業提供の成果、受講結果、受講生の反応等についてまとめる。

2. 「ICT 演習」について

「ICT 演習」は全学科の1年生対象に開講された。学科によって若干異なるが、カリキュラム上の「基礎教育科目」または「基礎・教養科目」に位置づけられ、1単位あたりの授業時間数30時間1単位の演習授業として配当されている。

2012年度は各学科の時間割に合わせ、「ICT 演習Ⅰ」（前期）「ICT 演習Ⅱ」（後期）各合計10クラス開講した。複数クラスを担当いただく先生もあり、専任教員1名と非常勤講師の先生5名の合計6名の教員で授業担当した。「ICT 演習Ⅰ」と「ICT 演習Ⅱ」はセットで、同じ時間割、同じ受講者（一部に一科目しか受講しない学生もある）、同じ担当教員となっている。

授業内容等については、表1（ICT 演習Ⅰ）と表2（ICT

演習Ⅱ) にシラバス内容を掲載する。

基本的には、前期の「ICT 演習Ⅰ」でパソコンの基本操作、タイピングから Word の操作までを修得する内容となっている。後期の「ICT 演習Ⅱ」では、

Excel と PowerPoint の操作を中心に修得する内容となっている。一年間この二科目を通じて、これまでまったく PC の操作経験がなくても、今後の大学での学習で必要となる Office ソフトの操作が一通りできるよ

表 1：2012 年度 ICT 演習Ⅰシラバス（全クラス共通）

授業のテーマ	コンピュータネットワークシステムと Word の基礎演習	
授業の概要	「ICT 演習Ⅱ」とあわせて、コンピュータの使用についての基礎演習を行う科目である。パソコンを用いたソフトウェア、学内のインターネットの使用を通じて、情報処理システムを理解し、これを操作・利用できる知識と技能を修得する。授業では、キーボード入力、学内ネットワークシステムの演習、MS Word 2010 の演習などを中心に進める。本学では、学内外の情報サービスをコンピュータネットワークで提供しているため、コンピュータの操作に不慣れな学生は、この科目を履修し、早期にこれらのサービスを受けられるようにすることが望ましい。	
到達目標	学内のコンピュータネットワークシステムを有効活用できる。 Word 2010 で基礎的な文書作成ができる。	
授業の計画	1. キーボード入力とネットワークシステムの実習 (1) ガイダンス、Windows の基本操作、光華 navi の基本的な演習 (2) 光華 navi の演習、学内のソフトウェアの説明 (3) タイピング、情報倫理 (4) 電子メール、光華 navi の演習 (5) ウェブによる情報検索 (6) 図書館利用の説明、図書検索システムの演習 2. Word 2010 の実習 (7) 基本操作、文字の入力と変換	(8) 文書の編集 1 (中央揃え、フォントサイズなど) (9) 文書の編集 2 (ワードアート、クリップアート) (10) 文書の編集 3 (表の挿入) (11) 総合課題 (12) 実技試験① (13) 実技試験② (14) 実技試験③ (15) Libre Office による文書作成ソフトの紹介と演習
授業方法	授業は演習を中心にし、その解説を行う形で進める。初学者にも十分に修得できるように配慮した教科内容となっている。また、単に操作法の修得に終わらず、自らコンピュータを活用していくことができるよう、コンピュータの基礎知識について様々な角度から解説し、理解を深める。毎回、課題を設けて例題を学習し、関連問題を宿題として課す形で進める。また、最後に総合課題を課すことによって、実践的な用法の修得を図る。	
評価方法	課題 35%、タイピング 10%、総合課題 5%、実技試験 30%、期末試験 20% によって総合的に評価する。	
担当者からのメッセージ (履修上の留意点等)	授業では教科書が必須なので、指定の教科書を必ず購入すること。なおこの教科書は、後期の「ICT 演習Ⅱ」で使用される	
教科書	森際孝司編 森際孝司・高野拓樹・中谷聡著 「社会人基礎力養成のための実践情報活用技術」ムイスリ出版 2011 年 3 月発行	

表 2：2012 年度 ICT 演習Ⅱシラバス（全クラス共通）

授業のテーマ	PowerPoint と Excel の基礎演習	
授業の概要	前期の「ICT 演習Ⅰ」とあわせて、コンピュータの使用についての基礎演習を行う科目である。パーソナルコンピュータを用いたソフトウェアの使用を通じて、情報処理システムを理解し、これを操作・利用できる知識と技能を修得する。この科目では、「ICT 演習Ⅰ」での基礎的な学習を受けて、より応用的な学習として、プレゼンソフト「PowerPoint 2010」と、表計算ソフト「Excel 2010」の利用を中心に学習する。	
到達目標	PowerPoint で基礎的な発表スライドを作成できる。 Excel で基礎的な表計算とグラフの作成ができる。	
授業の計画	1. 前期の復習 (1) Word での文書作成 2. PowerPoint 2010 の演習 (2) スライドの作成 (3) ワードアート、クリップアート、図表の挿入 (4) テーマに関する発表スライドの作成 3. Excel 2010 の演習 (5) 基本操作 (データ入力、表の作成など) (6) 計算機能 (四則演算など) (7) 基本的な関数 (AVERAGE、SUM、MAX、MIN など)	(8) オートフィル機能、相対参照と絶対参照① (9) 相対参照と絶対参照② (10) グラフの作成 (11) データの並べ替え、データの抽出 (12) 実技試験① (13) 実技試験② (14) 実技試験③ (15) Libre Office によるスライド作成ソフト、表計算ソフトの紹介と演習
授業方法	授業は演習を中心にし、その解説を行う形で進める。初学者にも十分に修得できるように配慮した教科内容となっている。また、単に操作法の修得に終わらず、自らコンピュータを活用していくことができるよう、コンピュータの基礎知識について様々な角度から解説し、理解を深める。毎回、課題を設けて例題を学習し、関連問題を宿題として課す形で進める。また、最後に総合課題を課すことによって、実践的な用法の修得を図る。	
評価方法	課題 40%、総合課題 10%、実技試験 30%、期末試験 20% によって総合的に評価する。	
担当者からのメッセージ (履修上の留意点等)	授業では教科書が必須なので、指定の教科書を必ず購入すること。なお教科書は、前期の「ICT 演習Ⅰ」と同じである。	
教科書	森際孝司編 森際孝司・高野拓樹・中谷聡著 「社会人基礎力養成のための実践情報活用技術」ムイスリ出版 2011 年 3 月発行	

うになることを目標としている。ただし、複数のアプリケーションを有機的に組み合わせて情報やデータを扱ったり、実践的に情報を活用したりするという、現代の情報社会のニーズに合った「情報リテラシー」として十分な内容、レベルとなっていないことは否めない。

また、10クラスのうち1クラスを担当する専任教員がコーディネータの役割を兼務し、授業内容や進行方法等クラス間での統一、調整をおこなっているが、実際にはこの教員が作成した統一シラバスに基づいて授業をおこなっていることと、前後期各開講前後に担当教員のミーティングを持つ程度で、日々の授業進行等は各担当教員の裁量に任されており、厳密な意味での統一した授業運営にはなっていないのが実状であった。

3. 教育改革の取り組みと「ICT 演習」

2011年4月に学長より各学科、部署に対して「学科の教育改革の指示書」が提示された。これは現在進行している2014年度からの学部学科改組をふまえた、本学の教育力強化の取り組みへの指示であった。この中で、具体的な指示事項として

「入学者全員にICT教育を課し「ICTに強い光華」ブランドにする」

という項目が盛り込まれていた。また、全学的推進課題として、

「全在学生におけるICTの基本資格（MOS資格）の取得」が挙げられた。

これらの課題についての検討部署として指名を受けた情報教育センターに対しては、

ICTの強化については、情報教育センターで24～25年度に向けて以下の項目の実施により「ICTに強い光華」のイメージを目指す。

- ① ICTの正課科目を一元管理
- ② ICT関連資格の取得支援を強化する（授業への組込、受験料大学負担等の検討）

※卒業生の6割がMOSのワード及びエクセルの資格取得を目指す

という指示があった。

これらを受け、情報教育センターとして検討を開始

し、以下を基本的考えとしてまとめた。

- ・情報教育センターの教学機能を強化し、情報リテラシー領域を全学共通教育として、その教育内容・方法カリキュラムの検討・作成に責任を持つ体制として検討していく。
- ・上記に関わる全学への授業提供を担当できる体制として検討していく。（ただし、可否については教務委員会等の判断に委ねる）
- ・ここで述べる「全学」とは短期大学部を含むものとするが、大学と短期大学は組織上別の学校であり、その教育方針・内容、修学年数、要卒単位数等も異なるため、当面は大学（現在の三学部五学科）のみを対象とし、短期大学部の扱いについては次段階での検討とする。
- ・ただし、科目履修等現行制度内で対応できることについては、短期大学部に対しても積極的に開放していく。
- ・どこまでの範囲を全学共通カリキュラムとするかは、今後詳細に検討していくが、第一段階として、既に大学全学部提供されている「ICT演習Ⅰ・Ⅱ」の主管を現在のキャリア形成学科から情報教育センターに移し、この運用（授業担当者のアサイン、実習室の配当等の業務を含む）を早期に情報教育センターで担当できるための体制変更と基本方針の学内コンセンサスが得られる様に調整を進める。
- ・教育内容・方法、カリキュラム等については、関係教員を情報教育センター兼務所員としてアサインし、現行の情報教育センター教員と合わせてセンター内に体制を作るか、別途情報教育検討委員会（仮称）を立ち上げ、その委員会で担当するかを早急に検討し、決定する。
- ・社会で求められる情報リテラシーの明確化とその確実な修得をめざす。
- ・学長指示にある資格取得については、当然考慮しながら進めるが、資格取得を重視するものではなく、あくまでも「情報リテラシー」として求められる本質を重視していく。

その後の学内状況等の変化にともない教育改革計画自体が変化していることもあり、必ずしも当初計画した上記基本的考えどおりにはなっていないところもあるが、本学における「情報リテラシー」教育の要は上

でも述べた「ICT 演習」であることは間違いなく、この科目を改革することが最重点項目として求められているという認識で進めた。

4. 情報教育専門業者との連携

「ICT 演習」の授業内容、授業方法等を改革することを考える中で問題点が二つに集約された。一点目は、複数クラス開講が必要とされるため、専任教員だけの授業担当は困難であり（そもそも本学には、もっぱら情報リテラシー教育が専門でその担当が出来る教員はごく少数しか居ない）、非常勤講師依存にならざるを得ないことである。シラバスを統一し、オリエンテーションで情報共有をおこなったとしても、やはり教員個々の経験や力量等からクラス間のばらつきを無くすことは難しい。また、基本的に非常勤の先生方はご自身の担当授業があるときしか学内におらず、学生との接触時間は自ずと少なくなる。この科目だけではなく、授業外での学生対応等が全般的に求められているが、特に初年次対象の「情報リテラシー」科目の特性として、疑問や興味を持ったときリアルタイムでそれらに答えることが、学生の成長、学習内容の定着のためにも重要であると考えられる。このため、学内滞在時間が短い非常勤講師の先生中心の担当には向かない科目であると考えられる。二点目は、これまで本学で提供してきた、Office を用いた PC 操作中心の情報教育は、ある意味時代遅れとなっていることである。社会が大学に求める「情報リテラシー」教育の質は変化してきており、より高度な情報分析、整理、表現、運用といった総合的な情報活用力が求められている。しかし、本学には残念ながらそういった領域の教育に関するノウハウがなかった。

これらの問題の解決を図り、「ICT 演習」授業をより効果の高いものとし、本学の教育改革に寄与できることを検討する中で、他学での取り組み等を調査した。その結果、以前は本学と類似した内容を、やはり非常勤講師中心の体制で実施しているところが多かったが、現在は専門の教育業者に全面委託したり、連携したりして「情報リテラシー」教育を進めている大学が多いことが判明した。

そこで、多くの大学からこれらの業務を受託している実績が多いある業者から、「情報リテラシー」教育

について授業運用と関連支援についての提案を受けることとした。授業内容については、「情報活用力」という視点で実績があり、それらを段階的に学生に修得させるノウハウとベースカリキュラム等がしっかり整っていることが分かった。アセスメントの仕組みも完備しており、受講生の学習成果等についての把握も十分行えることも高く評価できる。また、授業方法については、経験豊富なメイン講師陣と各クラスに必ずサブ講師が入り 2 名体制でおこなうことを基本としている。週一回の授業のみではなく、e-learning 教材等で授業外学習をおこなわせる仕組みも確立している。同時間に開講のクラスを除き、出来るだけ同一講師が複数クラスを担当する。授業後の講師の定例ミーティングを開催し、クラス間で差異が出ないように常に調整をおこなう。これらは、これまでの非常勤の先生方中心の授業運営の問題点を解決、改善するものであると考えた。

授業そのものとは別に、関連支援として「学習アドバイザー」というものも合わせて提案を受けた。これは、この授業に関する専任のアドバイザーが学内に常駐し、受講生からの授業に関する質問や別課題（授業のレベルに合わない受講生の個別対応）の出題や採点、その他関連する学生サポートを全面的に対応するというものである。これらも、上述した学内に居る時間が短い非常勤の先生方によるクラス担当の問題を解決するものであるが、考え方によっては、専任教員よりも手厚い授業外学習支援がおこなえるとも言える。学生の「情報リテラシー」向上には非常に有効な手段となると考えられる。

ただし、提示してもらった業務委託見積費用は、これまでの非常勤講師人件費とは比較にならない高額のものであった。教育という分野は「費用対効果」といった考えは馴染まないが、これまでの授業内容と、特に授業方法と比較して大きな教育効果が期待できると考えられたことから、当面 2 年間業務委託で授業実施することを認めてもらった。

5. 新しい「ICT 演習」

2013 年度の「ICT 演習 I」シラバスは表 3 のとおりである。

これまでの「ICT 演習」は前期に PC 操作、タイプ

ングと Word、後期に Excel と PowerPoint を中心とした内容であったが、見直しをおこなった授業内容では、シラバスを見ても分かる通り、前期のうちですべての Office ソフトについてまず基本的なところは

すべて修得し、後期のより実践的な「情報活用力」の学習・演習に備えることと大きく変化している。

表 4 が 2013 年度の開講クラス一覧である。2012 年度と同様 10 クラス開講した。時間割と学科別にクラ

表 3：2013 年度 ICT 演習 I シラバス（全クラス共通）

授業のテーマ	社会全般の情報化が著しく進み、道具であるパソコンがより使いやすく進歩していく中で、使い手である私たちには、パソコンの操作等に関する知識だけではなく、情報そのものを使いこなすことが、今後の社会を生き抜くためには不可欠になってきている。 本科目では、社会で求められている情報活用の基礎力を体系化し、如何に効果的に情報を活用できるかを実践的に学んでいく。	
授業の概要	大学での学習および生活において必須となる基礎的な ICT 利活用力を身につけることを授業の目的とし、キーボードのタイピング、学内ネットワークの利用・活用方法、レポート作成のポイン、各種分析方法の基礎、そしてプレゼンテーションのポイントなどを実践的に学ぶ。 具体的には、Office ソフトの操作学習を通じ、身近な素材を元に、文書作成ソフト（Word）ではレポート作成、表計算ソフト（Excel）ではグラフ作成や数値分析、プレゼンテーションソフト（PowerPoint）ではスライド作成といった、基礎力、実践力と応用力を養う。また、情報社会における様々な危険から自分たちの身を守るための知識、情報を扱う上での知識・技能である、広義の情報リテラシーの醸成も図る。	
到達目標	大学生活で不可欠な、基本的な ICT 利活用力の定着を目標とする。 1. 学内のコンピュータネットワークシステムを有効活用できるようになる 2. 見本に沿って、Word を使い各種文書が作成できるようになる。特にレポートは、指示された体裁に従って作成できるようになる。 3. Excel を使って、データの集計や表・グラフを用いたデータのビジュアル化ができるようになる 4. PowerPoint を使って、シンプルで見やすい発表スライドを作成できるようになる 5. Word、Excel などを組み合わせて、効果的なレポートを作成できるようになる 具体的なレベルとしては、各項目に設けられた課題のチェックポイントの達成度で評価をおこなう。	
授業の計画	回	内容
	1	オリエンテーション パソコンを始めとする情報ツールの全体を体験、概略を理解し、今後の学習に必要な基本的な環境の理解と利用方法を習得する
	2	セキュリティと情報モラル パソコン／ネットワークの利用における情報の適切な取扱い方法、著作権など関連する権利・法律を理解する
	3	Word の基礎 (1) Office ソフトの概要について理解し、その一種であるワープロソフト Word の基本操作を学習し、簡単な文書の作成演習を行う
	4	Word の基礎 (2) Word におけるレイアウト処理や画像などのオブジェクト操作や見出し書式の設定方法を学び、指示された書式に沿ったレポート作成演習を行う
	5	Word の基礎 (3) Word の基本操作を復習し、確認テストによる到達度チェックとフォローアップによって学習内容の定着を図る
	6	Excel の基礎 (1) Office の表計算ソフトである Excel の基本操作を学習し、簡単な作表や基本的な計算・集計の演習を行う
	7	Excel の基礎 (2) Excel の関数機能を用いたやや複雑な計算方法と、グラフを用いたデータ表現を学び、データの加工・集計結果を適切に表現する方法を習得する
	8	PowerPoint の基礎 (1) Office のプレゼンテーションソフトである PowerPoint の基本操作を学習し、簡単なスライド作成の演習を行う
	9	Word の活用 (1) 良いレポートの作成に必要な要件・機能を学び、Word を活用した文書作成方法を学ぶ
	10	Excel の活用 (1) 調査方法として身近なアンケートを題材とし、アンケート集計を通じて仮説を検証する方法を具体的に学ぶ
	11	Excel の活用 (2) アンケート集計を通じて仮説を検証する方法の演習を行う
	12	Excel の活用 (3) 10・11 回目で作成した検証結果をレポートに挿入する。レポートとして体裁を整える方法を理解し、実際に文書作成を行う
	13	PowerPoint の活用 (1) 10・11 回目で作成したアンケート結果をまとめたスライドを作成し、Excel の図表を PowerPoint に反映する方法を理解する
	14	PowerPoint の活用 (2) 13 回目で作成したスライドを更に加工し、効果的なスライドのポイント及び発表方法を学ぶ
	15	総合演習 期末課題への取り組みと評価により、最終的な到達度チェック及びフォローを行う
	16	定期試験 実施なし
授業方法	授業の内容に応じて、PC を使った実習と基礎知識に関する座学を使い分ける。また、e-Learning 教材や宿題により、様々な判断ケースの疑似体験や知識の定着を図る。 操作スキルについては、課題制作や理解度チェック、確認テストなどによる、こまめな状況確認とフォローアップの繰り返しで、着実な習得を目指す。別途授業外のサポートスタッフを配置し、必要に応じた個別対応をおこなう。	
評価方法	授業への参加度（30%）、課題の評価（30%）、e-learning 受講状況と演習問題等の評価（10%）、期末課題（30%）による総合評価	
担当者からのメッセージ（履修上の留意点等）	クラス指定の科目のため、必ず別途学科別等に指定されたクラスに受講登録すること。今後の大学生活において、レポート・プレゼンテーションには必ず直面することになります。そこで求められる ICT 活用力を、授業をサポートするアシスタントを積極的に活用しながら、身につけていきましょう。	
教科書	身近なテーマで作って学ぶ！学生のための Office2010& 情報モラル / noa 出版	

ス指定をおこなっている関係で受講者数が多いクラスと少ないクラスがあるが、合計 366 名の受講登録があった。この 10 クラスをメイン講師 4 名、サブ講師 3 名で担当した。図 1 が「ICT 演習 I」授業風景である。

表 4：2013 年度 ICT 演習 I 開講クラス

クラス	時間割	受講者数	メイン講師	サブ講師	クラス	時間割	受講者数	メイン講師	サブ講師
a	火曜 2 限	39	A	E	f	水曜 1 限	32	A	G
b	火曜 2 限	39	B	F	g	水曜 1 限	32	B	E
c	水曜 3 限	45	C	G	h	水曜 1 限	29	D	F
d	水曜 3 限	45	B	E	i	火曜 1 限	31	A	E
e	水曜 3 限	42	D	F	j	火曜 1 限	30	B	F



図 1：ICT 演習 I 授業風景

また、授業をおこなう実習室がある徳風館 5F エレベータホール前に専用の学習アドバイザーコーナーを設け、上記のサブ講師のうち 1 名を学習アドバイザーとして常駐してもらった。授業内ではメイン講師・サブ講師により疑問点を解消し、それでも補いきれない部分を授業外に学習アドバイザーが支援することで、理解度向上を狙った。学習アドバイザーには、授業期間中表 5 のとおり、週 4 日間（授業以外の時間）必ず在席してもらうようにした。

表 5：学習アドバイザー常駐スケジュール

曜日	時間
月	8:50 ~ 16:30
火	12:30 ~ 16:30
水	14:50 ~ 16:30
木	12:00 ~ 13:15

以上のような授業運営および支援体制で、前期「ICT 演習 I」授業を実施し、無事当初の予定を完遂することが出来た。

6. 授業運営と受講状況

4 月 9 日に最初のクラスの前期授業を開始し、7 月 30 日にすべての授業を予定どおり終了した。前年度までに比べて、授業方法や内容を大幅に変更したため、当初担当者間のコミュニケーション不足や思い違い等により少しスムーズに進められなかったこともあったが、授業の回を重ねるごとに順調に授業が進行できるようになった。残念ながら受講者全員が合格（単位取得）にはならなかったが、多くの受講生が最後まで頑張ってお勉強した。

授業は、ほぼシラバスに従い（途中全体の理解度を考慮して一部内容を見直したところもある）、項目ごとに基本的に 講義（講師からの説明）→ 演習 → 授業外学習（e-learning での補習・復習）→ 課題への取り組み → 課題提出・評価 というサイクルで進行した。演習等で理解が不十分と思われる学生には、サブ講師が個別にフォローをおこなった。授業のレベルが自分のこれまでの知識や経験と合わない（既に十分理解が出来ていてレベルが低いと感じる者と、これまで情報関係の学習（特に PC 操作）をあまりやらせておらずレベルが高いと感じる者両方がある）と感じる学生には、学習アドバイザーと連携して、個別課題や個別目標を設定し、学習アドバイザーによる授業外でのフォローによりドロップアウトを防ぐことを考慮した。

図 2 が、前期末に最終的に登録した受講生の成績（合計評価の素点）分布をまとめたものである。全体の成

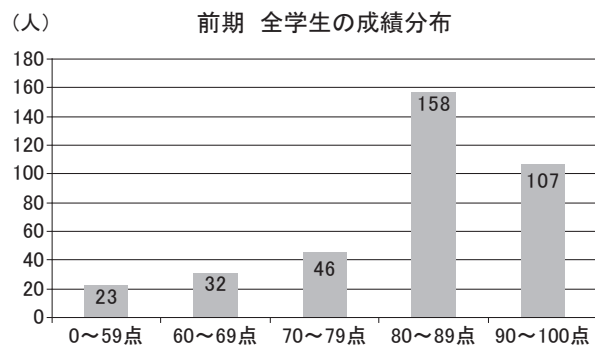


図 2：ICT 演習 I 最終成績分布

績は全般的に非常に良いことが分かる。成績評価対象となった受講生 366 名のうち合格者は 343 名で、単位取得率は 93.7%であった。また、本学における「秀」または「優」評価（80 点以上）の比率が 72.4%になった。これは成績の評価基準が甘かった訳ではなく、多くの受講生が真面目に課題や宿題等に取り組み、設定されている到達目標を十分満たした結果であると考えている。講義系専門科目等では望ましい成績分布ではないと言えるかも知れないが、実習・演習を中心とした「情報リテラシー」修得が目的の科目の特性としては、ある意味妥当な結果ではないかと考えている。前年度までの結果と詳細に比較・分析していく必要があるが、感覚的には単位取得率、学生の実際の知識・技術の修得の度合いもこれまでよりは大幅に改善している様に思える。

不合格（「不可」または「欠」評価）となった受講生は 23 名であった。課題や宿題を未提出という学生も多いが、総合評価で合格点に達しない最も大きな要因は出席不足である。15 回の授業のうち出席回数（規定回数以上の遅刻も含む）が 10 回（3 分の 2 以上）に満たない学生は成績評価の対象にならないということを授業内で何度も強調し、とにかく授業には出席す

る様という指導をおこなった。結果的に出席要件を満たしていない学生は総合評価点数が合格基準には満たず、全員不合格となった。授業に真面目に出席していれば、自ずと学習することになる（授業では講師が個別に目を光らせており、サブ講師や学習アドバイザーと連携した個別フォローの対象となる）ので、きめ細かく漏れの無い指導がおこなえたと考えるが、授業に出席しない学生をどのように授業に出席させるかは今後の大きな課題の一つである。多欠席な学生が特定の学科に集中していることも大きな問題である。本学学生は 1 限目の授業を嫌う傾向も見受けられるが、今回 10 クラスのうち半分の 5 クラスが 1 限（火曜日と水曜日）であったことも影響しているのかも知れない。しかし、「朝が弱い」などという言い訳は社会人として到底通用するものでは無く、このあたりの意識を変えさせることも大学教育に求められているのかも知れない。

授業進行にともなう出席率の変化についても分析した。表 6・図 3 がその結果を示したものである。

これらを見ると、授業進行にともない出席率は全般的に下がる傾向にあることが読み取れる。ただし、どの授業も出席率はほぼ 90%を超えており、これは他

表 6：ICT 演習 I 授業ごとの出席者数・出席率（全クラス合計）

授業回	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	7 回	8 回	9 回	10 回	11 回	12 回	13 回	14 回	15 回
出席者数(人)	359	359	349	347	348	343	346	333	341	333	333	328	314	332	327
出席率	98.1%	98.1%	95.4%	94.8%	95.1%	93.7%	94.5%	91.0%	93.2%	91.0%	91.0%	89.6%	85.8%	90.7%	89.3%

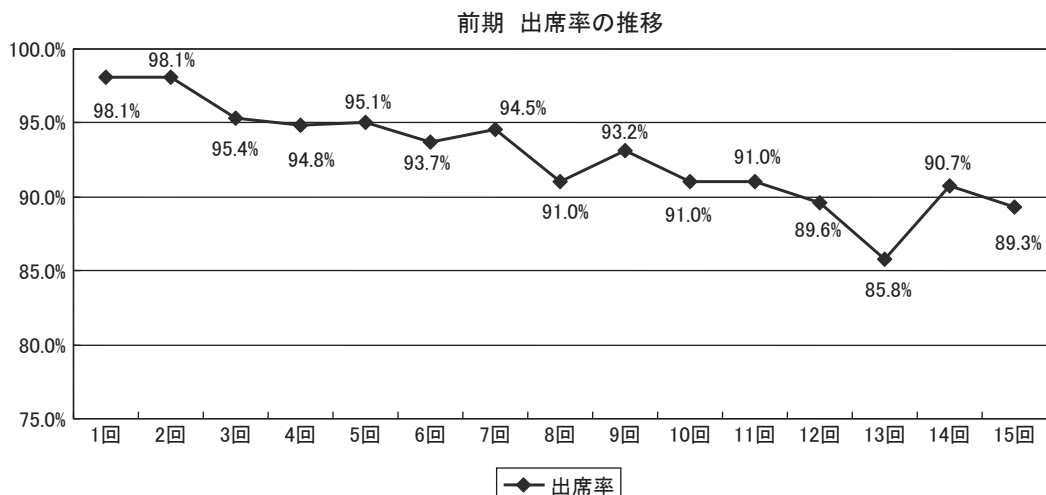


図 3：ICT 演習 I 授業ごとの出席率推移（全クラス合計）

の科目ではなかなか実現できないことではないかと思う。必修科目では無いことによる気の緩みや、授業外で行う課題の多さも欠席率が上がった要因ではないかと考える。また、8回目から始まった Excel の授業を欠席した学生が、その後の授業に出ても分からない事が続き、欠席するようになるという傾向が見られる。14 回目に一旦下降した出席率が向上しているのは、14 回目から PowerPoint の授業になった（苦手意識を持つ Excel の授業が終わった）からではないかとも考えられる。6 回以上欠席した場合に単位取得が認められないということを強調したため、これまでの出席状況が厳しかった学生が途中で単位取得を諦めてしまったことも想定される。

いずれにしても、上述したとおりこの科目はとにかく出席すれば、それぞれの学生のレベルに応じて学習フォローをおこなうことが出来る（多くの学生は特別のフォローは必要ない）が、欠席しがちな学生の気持ちをどうやって授業に向かわせるかが、今後の大きな課題の一つである。これは「ICT 演習」に限った問題ではなく、本学の授業全体に関わる問題として捉える必要があるのかも知れない。

今回の取り組みでは、「学習アドバイザー」の導入が授業外でのきめ細かい学生への個別フォローに大きく有効で、これまでの非常勤の先生方中心の授業運営と最も異なるものである。前期中の学習アドバイザーの利用状況をまとめたものが、表 7・図 4 である。半期間で総計のべ 236 回、1 日平均 3.8 件の利用というのは多いか少ないか何とも言えないが、少なくとも一部の受講生にとっては、「ICT 演習」授業外での学習等に活用できる有効な存在になっており、当初の目的は達しているのではないかと考える。

表 7：月別・項目別「学習アドバイザー」利用状況

	4月	5月	6月	7月	総計
ID 関連	3 件				3 件
授業課題	6 件	41 件	51 件	60 件	158 件
PC	16 件	11 件	4 件	1 件	32 件
資格				4 件	4 件
その他	10 件	10 件	10 件	9 件	39 件
総計	35 件	62 件	65 件	74 件	236 件
稼働日	11 日	16 日	16 日	19 日	62 日
1 日平均	3.2	2.2	2.2	3.9	3.8

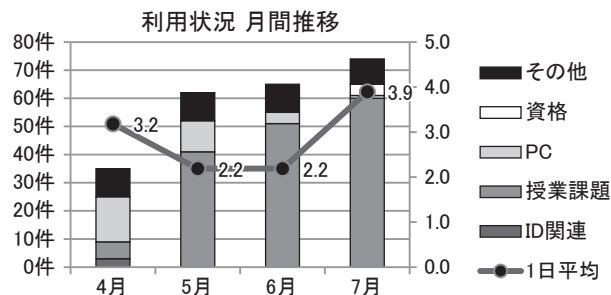


図 4：「学習アドバイザー」利用状況月間推移

7. 受講生からの評価

教育専門業者への業務委託というこれまでとは全く異なる形態で授業運営をおこなったこともあり、受講した学生がどう評価しているのかにも注目した。全学で実施されている授業評価アンケートとは重複しない質問項目を用いて、最終回の授業内でアンケート調査を実施した。その結果が図 5・図 6・図 7 である。

細部の分析は今後おこなっていくが、全般的に受講生は、この授業については肯定的に受け取っていることが読み取れる。（受講生がこの授業形態を他の授業とは異なるものと認識しているかどうかは不明）

また、自由記述にも多くの回答記載があった。その代表的なものとしては、多いものから順に「苦手意識が改善された、パソコン・Office のスキルが向上した」（36 件）「分かりやすかった」（26 件）「後期への意欲がわいている」（20 件）「楽しかった」（18 件）「講師への感謝」（15 件）「扱っている内容が他の授業で役に立った、将来役に立つ」（13 件）「質問しやすかった」（7 件）等である。

これらの記述からも、同様に多くの受講生がこの授業を前向き、肯定的に捉えていると考えられる。

8. おわりに

今回 2013 年度から、主に PC を使ったの実習を通じて、情報機器の操作、使いこなすから情報の有効な活用を学ぶ情報リテラシー関連科目である「ICT 演習」授業を、これまでの非常勤講師の先生方担当で授業運営する形から、授業運営と関連する支援を一括して、情報教育を専門とする業者への業務委託に切り替えて実施した。業務委託といってもいわゆる「丸投げ」で

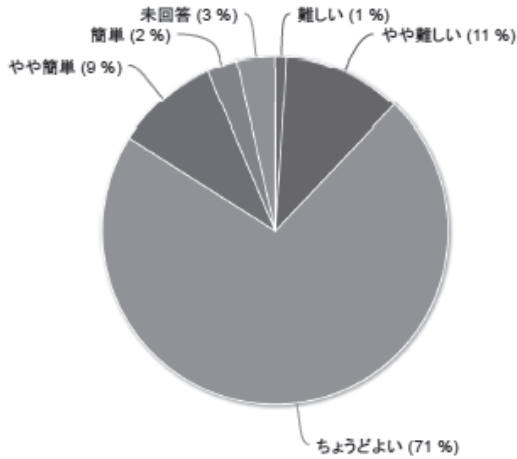


図 5：「授業難易度」に関するアンケート回答結果

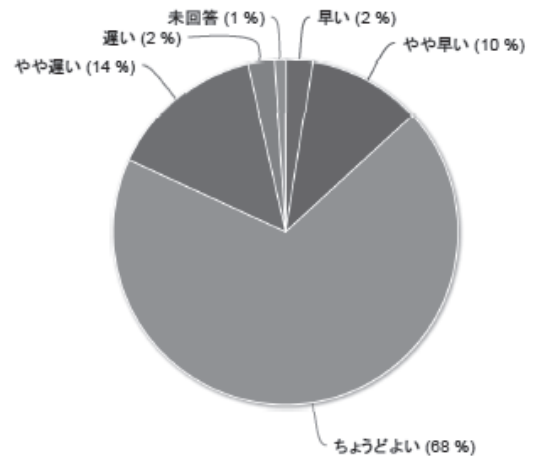


図 6：「授業スピード」に関するアンケート回答結果

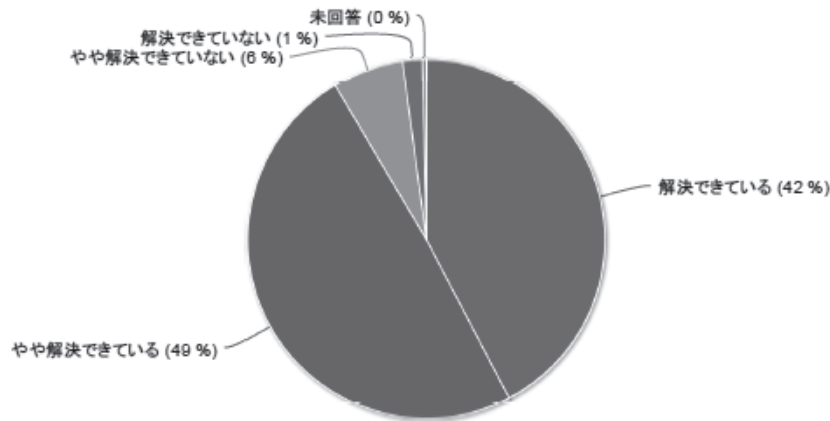


図 7：「疑問点の解消が授業内でできたかどうか」に関するアンケート回答結果

はなく、授業計画や授業運営の主体（最終成績評価の責任も）は、本学情報教育センター専任教員である筆者が担い、その指示のもと専門業者と連携して進めたというのが正確なところである。特に、授業をスキル・教育経験等ほぼ均質な複数のメイン講師・サブ講師で担当すること、専任の学習アドバイザーを学内に常駐させ、受講生の授業外学習のフォローをおこなう等はこれまでの体制では出来なかったことである。

まだ前期「ICT 演習Ⅰ」一科目が終わった段階で、今回の取り組みの善し悪しを評価するのは早計であると考え。しかし、本稿で述べたとおり、受講生の単位修得状況、成績、学習アドバイザーの利用状況、アンケートによる評価等から総合的に判断すると、今回の取り組みは「情報リテラシー」修得という領域において有効な教育方法であったのではないかと考えられる。

ただし、これまでの授業運営にかかる費用（これまでは基本的に発生する費用は授業担当する非常勤講師人件費のみ）が、大幅に増えている。教育には、「費用対効果」という考え方は本来馴染まないのではあるが、当然そういったことも意識していかなければならない。

いずれにしても、後期「ICT 演習Ⅱ」の結果もふまえ、今後の「情報リテラシー」教育はどうあるべきか、本学にとってどういった授業運営が最も適しており、必要とされているか等をよく考えていきたい。

まったく別の視点であるが、同一科目の複数クラスをそれぞれ別々に独立して運営する（シラバスは統一されているとしても）のではなく、今回のように一括して総合的に運営したことにより、学生の受講状況、学習状況や成績その他のデータを多く採取することが出来た。これらを精緻に分析することは IR

(Institutional Research) 的にも非常に有意義で、多くのことが確認出来るのではないかと実感した。是非こういった視点からも様々な新しいアプローチを進めていきたいと考えている。

参考文献等

- (1) noa 出版編、身近なテーマで作って学ぶ! 学生のための Office2010& 情報モラル、ワークアカデミー (2011)
- (2) 本田直也監修・noa 出版編、考える伝える分かちあう情報活用力、ワークアカデミー (2010)
- (3) 本田直也・細井成、“共通情報教育での情報活用力試験の導入と教育効果の測定”、教育システム情報学会第 33 回全国大会講演論文集 pp.252-253、教育システム情報学会 (2008)
- (4) 本田直也・吉川聡、“情報活用力テスト Rasti を軸とした教育教材開発と全学統一授業の実施”、2008 PC Conference 論文集 pp.238-241、コンピュータ利用教育学会 (2008)
- (5) 本田直也・近藤伸彦・細井成、“共通情報教育の実施と情報活用力試験を用いた教育効果の検証”、教育システム情報学会第 34 回全国大会講演論文集 pp.112-113、教育システム情報学会 (2009)
- (6) 本田直也・近藤伸彦・吉川聡、“大学の初年次必修情報科目における ICT 活用力の育成”、2009 PC Conference 論文集 pp.265-268、コンピュータ利用教育学会 (2009)
- (7) 新垣円・本田直也・近藤伸彦、“共情報活用能力育成に繋がる授業運営要因の分析”、教育システム情報学会第 35 回全国大会講演論文集 pp.112-113、教育システム情報学会 (2010)
- (8) 本田直也・新垣円・近藤伸彦、“「情報活用」授業実践における学生の能力向上を促す要因分析”、2010 PC Conference 論文集 pp.147-148、コンピュータ利用教育学会 (2010)
- (9) 近藤伸彦・本田直也・新垣円・近藤伸彦、“「情報活用」授業運営モデルの組織的な開発と実施”、2010 PC Conference 論文集 pp.31-34、コンピュータ利用教育学会 (2010)
- (10) 生田目康子・吉川聡、“ICT 活用力診断テストを用いた学部 3 年次の教育効果の測定”、2010 PC Conference 論文集 pp.47-50、コンピュータ利用教育学会 (2010)
- (11) 酒井浩二・阿部一晴、“全学共通科目での情報機器操作と情報活用力の習得法の考察”、2011 年度 第 6 回研究会 研究報告書 vol.26, no.6 pp.61-68、教育システム情報学会 (2012)
- (12) 特定非営利活動法人 ICT 利活用力推進機構、“情報活用力診断テスト Rasti”、<http://rasti.jp/> (2013)